

○ベニバナの種子の利用(久内清孝) Kiyataka HISAUCHI: Safflower as an oil plant.

古く未摘花の名で知られたベニバナ (*Carthamus tinctorius* L.) はベニの原料として名高く、化学ベニ以前に於ては相当重用な資源植物であつたものと見え、宮崎安貞の農業全書にしろ、佐藤信淵の草木六部耕種法にしろ、詳しく栽培法を記述しているが、どこまでも染料としてのベニを目的にしたもので他のもの、たとえば種子の油などはあまり重視しないで燈油にするとか、その油煙で墨をつくる位のことであつたが、外国の書を見ると種子が油料資源として大規模に耕作されている。利用転換の一例として記しておく。

□Das Pflanzenreich の続刊

プランツエンライヒは従来、それ迄知られた科の4分の1に近いものが105 Heft まで出版されたが、第二次世界大戦で中断され、1943年の爆撃でこの大事業は不可能になつたように思われた。当時 editor の手許にあつた、F.E. Wimmer の Campanulaceae-Lobelioideae の前半が Heft 106 として1943年5月25日ライプチヒで出版されたが、まだ配布されないうちに、極少数部を残して、大爆撃で炎上してしまつた。

其の後、プランツエンライヒは R. Mansfeld 教授編集の下につづけられることになり、やはり Wimmer の Campanulaceae-Lobelioideae の後半が Heft 107 として、ベルリンの Akademie-Verlag の手で1953年12月30日印刷された。この巻は Wimmer の終生の仕事となるものである。彼は1924年来、個人的に主要なハーバリウムで研究し、欧米の大踏葉館の所有標本を再検討し、その上、初期のプランツエンライヒの著者のあるものとは異なり、アメリカの植物標本を豊富に持つている研究所から自由に標本を借用研究しているので、彼の仕事は国際的見解に立つものと考えられる。一般に属の見解は広く、種のそれはやゝ狭い(例 *Lobelia cardinalis* の群では、4種を認めている)。Das Pflanzenreich IV, 276 b, I Teil (106 Heft), 260 pages, with 4 maps and 55 figs. [incl. 4 plates]. Leipzig, Wilhelm Engelmann, May 25, 1943.

IV, 276 b, II Teil (107 Heft, pp. I-VIII, 261-814, with figs. 56-112. Berlin, Akademie-Verlag, December 30, 1953. (佐竹義輔)

□牧野富太郎: 学生版原色植物図鑑 [園芸植物篇] 北隆館, 昭和29年12月発行 260+55頁 650円。

前に出た学生版野外植物篇では既成の牧野図鑑の白図に着色したものであつたが、この図鑑では親規に加えた種類と挿図が多く、その点で学生版と銘打つてはあつても、参考となる。行文も大分軟かくなつたが、同時に出た原色動物図鑑(水棲動物篇)に較べて未だしである。(F. M.)

□中西悟堂: 植物界のふしぎ ポプラ社 昭和29年10月発行. 284頁 300円。

中学生対象だが、中にトチカガミの越冬芽浮游の事実は面白い記録と思ひ、それだけを紹介。(F. M.)